

whoの方がよいと思われる。

・「一姫、二トラ、三ダンプ」と恐れられている女性ドライバーではあるが街のここかしこスイスイと走っているがdriverはheで受ける。

It seems also that everyone is going around with a chip on his shoulder, taking the stand that he is going to live by himself as he likes. Can a human being live in such a manner?

For instance, isn't a driver able to go around in his car only because he is hoping that other drivers will adhere to the traffic laws and regulations.

・everyone, everybody は通例he で受けるが、男女両性を明らかに示すためには苦し紛れてhe or sheで受けている。

Everybody spoke out plainly just as he or she thought.

(curme): [英文法シリーズ] 五島忠久著より

・1971年2月号の中央公論に「書と字」と題して白井晟一氏(建築家)、白川静氏(立命館大学教授、中国文学)との対談の中で白川氏は次の様に述べていた。( ) ( )

「ことばとは神のすみかであるといわれますが、文字は、存在をその形のうちに含む器です。われわれは1つの文字のうちに、そこに、1つの物体、1つの観念、1つの精神を見ることができる。1字1字がそれぞれの存在と意味をになうものとして、彼自身の小さな世界をもっているのだといえます。」

Cogito, ergo sum. デカルトの言った有名な言葉ですが、私達は、考えられる時には、各々の言語を用いて思考するわけですが、私達が外国語を学習する時に、語法、文法等と共にそれを母国語としている人々がその言語を用いて、どのような思考法、発想法をしているかということも学習する上で、大切なことではないかと思います。日本語と英語とを比較して、語法、文法と共に思考法、発想法を比較してみようと考えている近頃である。

(1971.8.)

## 万葉集 二 題

中 島 モモエ

2983 高麗劍<sup>こまろけん</sup>己<sup>おの</sup>が心から外<sup>そと</sup>のみに見つや君に<sup>きみ</sup>恋<sup>こひ</sup>ひ<sup>な</sup>む(作者不明)

万葉集巻12、物に寄せて思を陳ぶる歌百五十首の中の 一つ。「高麗劍」は高麗劍の<sup>な</sup>又<sup>また</sup>と同音の<sup>な</sup>己<sup>おの</sup>にかかる枕詞、己<sup>おの</sup>は古い1人称代名詞。「朝鮮文化との関係」という観点から、万葉集を日本古典文学大系によって読み直して、目にとまった歌である。

高麗剣が枕詞に使われている例は、他にも巻2 199「高市皇子尊の城上<sup>きのへ</sup>の<sup>あらみや</sup>殯宮の時、柿本朝臣人麿の作る歌」に、その柄頭に<sup>わ</sup>鍔飾<sup>つば</sup>があるところから、和<sup>わ</sup>麿<sup>まろ</sup>が原の枕詞にしているのがある。こうしたところから見ると、当時工芸の先進国であった朝鮮からもたらされたりっぱな剣として、人人の関心が深かったことが思われる。

なお、高麗を冠した品名としては、高麗錦が7例、当時の民俗的信仰から衣服の中で特に大切なものとした紐に、この貴重な高麗錦を詠みかけた歌がある。

その他、朝鮮関係の名称として詠みこまれているものにカラがある。カラはもと朝鮮半島南部の1国、後に朝鮮全部をいい、それが「外国」の称となり、唐を指すのもその意味であるという。原文に韓<sup>かん</sup>の字が使われているものに、韓国、韓衣、韓藍(けいとう)、韓埼などがある。

また、彼の地から多数の人々が渡来していたことは、大伴安麿の家に寄住していた<sup>百濟</sup>の尼理願逝去の時に詠んだ坂上郎女の歌(460.461)や、前記柿本人麿の長歌の中の「言さへく 百濟の原ゆ」という表現からもうかがわれる。百濟の原は百濟からの渡来人が多く居住していた所の名称であり、百濟人のことばがわかりにくく響くところから「言さへく」がその枕詞となっているのである。

こうした文化的交流の状況から見て、朝鮮語が日本語にはいり、日本語が朝鮮語にまじるという現象も当然起こり得たであろうと思われる。朝鮮語と日本語が同系であるか否かは別として、偶然の一致か、借り入れか、あるいは遠い根から分れたものか、ともかく、万葉集の中で朝鮮語と同源のことばと考えられるものを、古典文学大系では70語ほど取り上げている。

前記高麗剣、あるいは剣大刀の<sup>な</sup>力<sup>ちから</sup>は、朝鮮語で<sup>な</sup>力<sup>ちから</sup>を意味するnalと同源であると考えられ、集中、同音の<sup>な</sup>己<sup>おの</sup>にかかる例2、<sup>な</sup>名<sup>な</sup>にかかる例3を見いだした。また<sup>な</sup>己<sup>おの</sup>は朝鮮語における1人称代名詞naと同じであり、8例を数えた。

その他、同源と思われる語を若干ありてみると、

- まねし(多い)                      manesi
- ① man tha
- 82うらさぶる情<sup>こころ</sup>さまねし
- 167日月の数<sup>まね</sup>多くなりぬれ
- 4198逢はぬ日まねみ思ひそわがする      等 20例
- あに(反語)                      ani
- ① ani(否定)
- 345濁れる酒にあに益さめやも      等 4例
- たく(楮)                      taku
- ① tak
- 217たくなはの長き命を
- 285たくひれの懸けまく欲しき

羅

460 たくづのの新羅の国ゆ 等 11 例

○くはし(美しい) kufasi  
 (朝) ko:p ta

52 名くはし吉野の山は

1967 かぐはしき花橘を

3222 うらぐはし山そ泣く児守る山 等 18 例

○くしろ(釧) kusirō  
 (朝) kusul (珠)

1766 吾妹子は釧にあらなむ

1792 玉釧手に取り持ちて 等 5 例

日本・朝鮮交渉の歴史は、朝鮮を生まれ故郷とし、そこに多くの教え子を残して、心通わせている身にとっては、ひとごとならず胸がいたむ。しかし、万葉集にみえるおおらかな交流の姿には、わたしを安らがさせてくれるものがある。

× × × × ×

4292 うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨りしおもへば

巻19にある、大伴家持が天平勝宝5年2月25日の作。時に家持36才。同月23日に詠んだ、

4290 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも

4291 わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

と共に、彼の抒情歌の最もすぐれた作品とされているものである。

この歌にはじめて接したのは、朝鮮の片いなかで小学校に勤めながら、文部省の中等教員検定試験を目指して、独りコソコソ国語漢文の勉強に取り組んでいた、はたち前の多感な年代であった。わたしはこれに「春愁」と題して、爾来40年、愛誦歌の1つとしてきた。

悲しむべき何ら具体的な原因も理由もなくして、しかも全身をひたす春愁——それは純粋な生の根源から出たものであり、やみがたい人間存在の悲しみとでもいうか。わが心から湧き出て、わが心をうるおし清めるものがそこにはある。

ところで、さきごろ、野地潤家先生の文集「源平桃」を読んでいた、「青年たのしみなきも自ら欣豫す」の1句に、胸がビリリとふるえるような共感を覚えた。野地先生の学生時代に漢文学専攻の教授が板書して示されたものだそうで、「これという楽しみがなくても、ふのずからに欣豫しうるものをもつのが若さというものだ。」と説かれたということである。

字源によれば「欣はよろこびて気の浮き立つさまなり。」「豫は安んじ楽しみてよろこぶ、悦なり。」とある。

刻苦精進そのものの中において、生きること——歩むことのよろこびを静かにかみしめ、おおらかな充実感の中で自分に問いかけて行く生き方への示唆と受け取って、さて考え合わせてみると、春愁と欣豫、一見異なるがごとくにして、実は同じ根から出たものではないだろうか。そして、自己内奥への深い沈潜とより高いものへのあくなき志向、この春愁と欣豫を失わぬところ、暦年令を越えた精神の若さが保たれるのではないか、そうありたい——と、しきりに思うこのごろである。

## 詩 と 科 学

—我ら大学で文学は可能か？—

丸 山 幹 正

Roman Jakobsonは1958年、インデアナ大学に於ける学会で、彼の40年にも渡る情熱をかけた新しい詩学の1つの決着として次の如く述べている。

しかしここに在る我々すべては次の事に気付いている。即ちそれは言語の詩的機能についてつねに棧敷に在る、いかなる言語学者も、かつ又言語学的問題に無関心でかつ言語学的方法に不慣れないかなる文学者も共に、**凶悪なアナグロニズム**であるという点だ。」(筆者傍点)

JakobsonがMajakovskijらFuturistの詩人らと共にThe Moscow Linguistic Circleを設立したのは1914年であった。又Kuruteneらの言語学者らはSaussureの理論と並行しつつもその美点を先取して、The Petersburg Society for the Study of Poetic Languageを1916年設置している。このように言語学者らが詩人らと共に言葉との対決に向った理由には、ロシアSymbolismやAkmeismの低迷を一举に巻き返そうとするロシアFuturistらが新たな言語、リズムを発見せむとする正に血みどろの闘いに入つた事と無縁ではない。その最大の論客がかの、Xlebnikovであり、その実践者がさきのMajakovskijであった。その動きは**symb**と呼ばれた。と同時にこのような言語自体へ向き直つた姿勢の中には、Gスタイナーの言う如く、**symb**言葉に対する不信感と決して無縁でない要因がある。正に「神も死に」「言葉も死んだ」のである。あれ程の光彩を放つた所の古典なるものも見るかげも哀れに崩れ去つた。大学で非現実の世界では、あれ程自由に言葉を操つた者たちも現実には最少の力さえ持ち得なかった。何故か、文学とは何か、文学部とは何か？これがJakobsonのG.Steinerの問いかけではないだろうか。彼らは言葉の真実を新しい仕方で問う所から始めるのだ。「文学とはものそのものでも素材でもなく、素材と素材との関係である。」「そこに於いて我々がとり上げるのは思想ではなく、言語の事実である。」(Noveishei Russkoj poeziiya) (思想ではないという所に妙なものを感ずるがこれは後に述べる。)こうしてJakobsonやKuruteneらに、ついに文学をその内在的記述であるとし次のように公式化している。「詩は美学的機能を帯びた言語である。従つて文学に関する学の対象は文学そのものではなく、文学性即ちある作品を文学的作品にしている所のものである。」(Noveishei Russkoi Poeziya), この筆者がア